

文 化

父の「立場」を喪わせたこと

松井 今朝子



まつい・けさこ
作家。1953年京都市生まれ。早大院修了。松竹で歌舞伎を担当し、退職後フリーに。著書に「吉原手引草」(直木賞)、「仲蔵狂乱」(時代小説大賞)など。

して、父が調理場に立つ姿を見届けた。
姉妹は共に後を継がなかったが、それは残念ながら大恋愛の末に家業を放棄したというよう

な通俗小説的顛末では全くない。
妹は見合いで歯医者に出

て、私は大学から東京に出て、さまざまな職に就きながら今日に至った。本音はともあれ、両親は私たち姉妹に後を継

げと言ったことはただの一度もなく、「ほんまに好きやないと、この商売はでけへん」が母親の口癖だった。

私の子供の頃には比べるべからず、と外食の普及は著しく、びつくりするほど飲食店が増えたせい、実家が祇園の料理屋だということ

にかぶる文字通りの水商売を半世紀も続けられた。経営者は何度となく個人

の持ち出しで店を支え、借金をしないでいただけましというふうな状態になる。

意欲や能力に乏しい人間が漫然と親の仕事を引き継げば、不要ながらみばかりを引きずって、

物事に発展性がなくなるのは何も政治に限った話ではなからう。「ほんまに好き」ではない娘たちに両親がむりやり家業を継がせよとしないかった

幸い従業員の中にも後継者がすでに見つかっていて、私と妹も何度かその方と話し合いを持ち、めでたく譲渡が成立したが、そこに漕ぎつ

るまでの道のりは必ずしも平坦ではなかった。家業を他人に譲るに当たっては、どうやら身内が

んなり引き継ぐのとは違

った軋轢が生じるらし

おふくろの味という言葉に昔から強い違和感を覚えるのは、私がそれを全く知らないせいだろう。うちでいつも包丁を握るのは父親のほうだった。

京都の祇園町で「川上」というささやかな割烹料理屋を開店してちょうど五十年目に当たる今年、

有限会社の決算日に当たる八月末日をもって両親は従業員に店を譲る形で引退をした。長女の私と妹は最後にきちんとお金を払うカウンター

の客と

く、周囲に無用のさざ波
が立つのを伝え聞くと
ど、私は大げさにいえ
この国の民度を疑いな
ら腹立たしさを覚えた。

そして何よりも難関と
して立ちほだかったのは
父親自身の気持ちであ
る。後継者を自ら決めた
はずなのに、途中で何度
か心境が変化して、周囲
はそれに振りまわされ
た。かえって他人だから
よかったようなもので、
なまじ婿だつたりした
ら、私と妹は「リア王」
のゴネリルヤリーガンの
ごとく父親と完全に決裂
し、敵対するはめになっ
たのではないか。

去年、軽い脳梗塞を患
つてからも父が包丁を握
り続けることは、家族や
従業員にとって心配の種
だった。趣味の豊かな人
だから、まだ元気なうち
に引退して余生を十分楽
しめばいいように思われ
たが、当人は土壇場で現
役に意外なほどの強い未
練をみせた。

役者が舞台で死ぬるこ
とを望むように、父が調
理場で斃れたら本望とす
る気持ちにはわからないで
もなかつたけれど、共に
調理場に立つ若い従業員
の気苦労と傍迷惑を考
えれば、娘としては放置す
た。

「老害」という哀しい言
葉がよく聞かれたのだ
はいつの頃からだった
か。人はみな「若い」と
無縁ではられないにも
かかわらず、親にしろ他
人にしろ、老人が若い者
の負担にならないといっ
たらきれいな事だし、子供
にとつては親が他人に
「老害」と見られるのは
忍びないものである。

せつかく店を他人に譲
るといふ潔い決断をした
のなら、未練がましいと
思われずに、引き際も潔
くして、最後までカッコ
イイ父親であり続けてほ
しいと、娘たちは強く願
った。説得に難渋して、
時に怒鳴り合いの喧嘩ま
でしたのを恥ずかしく想
い出す。

その日は鍵形になった
カウンターの角に座つ
て、私は父の姿を真横か
ら眺める格好だった。ま
ずハッとしたのは父が握
る包丁と前に置かれた分
厚い組板との位置関係
だ。まぶたにある光景と
かなり違っているのに愕
然とし、すっかり背中の
曲がった父親に若いころ
の面影が重なって、なん
ともいえない気持ちだっ
た。

次にハッと気づいたの
は、あの大きな組板の前
こそが、父にとつては文
字通りの「立場」である
ことだった。料理人ほど
「立場」を比喻ではなく
実感させる職業はないよ
うに思われた。

人が生きるには、ただ
生活費があればいいとい
うものではなく、そこに
何らかの「立場」が必要
なのかもしれない。父が
父が現役にこだわったの
は、自らの生きる「立場」
に執着したのだ。結果と
してそれを喪わせたこと

で、ほんの一瞬、私は激
しく後悔した。
けれど今や昔よりも高
い位置になってしまった
組板の上で懸命に包丁を
引いている手つきを見
て、胸のうちにそっと父
に語りかけたものだ。も
う限界でっせ、やっぱり
これでよかつたんとちが
いますか……。

五十年の重荷を肩から
おろした父と母は、京都
郊外の自宅で以前よりず
っと元氣そうに暮らして
いると、先日妹が電話で
私に話してくれた。